

【コラム】

「キャリアヒストリーを書く」

渡邊 洋子

Writing one's own career history

WATANABE, Yoko

現代の複雑化する専門職状況の下、多様な現場で、仕事に関わる／の中での省察（振り返り）が、自明になりつつある。ショーンの指摘を俟つまでもなく、あらゆる仕事の領域で「実践をめぐる省察」（reflection-on-practice）や「実践の中での省察」（reflection-in-practice）の果たす役割が、ますます重要になってきたのである。この省察とは、職務上の目標達成や作業課題に取り組むプロセスにおいて行われる省察を指す。

だが、生涯教育学という視点で考えると、省察の意義や効用は、仕事現場の「実践レベル」に限られたものではない。生涯キャリア（生涯を通じたキャリア）を見通す際に、より有効性を発揮すると思われる。その省察は「専門職／職業人／働く存在として、いかに生きてきた／いる／いくか」という問いに関わる。専門的職業の従事者は、自らが向き合う状況が複雑で多面的になればなるほど、また自らの仕事への社会的期待・要請が多くなればなるほど、職業人として自らの立ち位置を常に確認し、生涯キャリア的な視点から「今」を見つめ直すことをより切実に求められる。必要なのは、自らが職業人として培ってきた信念や価値観を問い返し、それらを「今」の働き方と照らし合わせて整合性を検討しつつ、さらに、その延長線上に自分の将来の姿を見通していく、という省察なのである。

生涯キャリアにおいて、キャリアデザインとキャリアヒストリーは、タテ軸とヨコ軸をなす。キャリアデザインは、就業以前のキャリア教育に位置づけられがちだが、就業後はより現実的に、仕事のしかたや職業人としての生き方を方向づける具体的指針となるものである。それは同時に、「今日」「現在」の自分を「明日」「将来」の自分に向けて、前進させていく道筋を生み出す。道筋をたどる中で、「今日」は「昨日」となり、「明日」が「今日」となる。その積み重ねが「過去—現在—未来」の時間軸を形成し、その周囲にキャリアヒストリーを生み出していくのである。

「キャリアヒストリーを書く」営みは、この「専門職／職業人／働く存在」が、自らの生き方を振り返り、時間軸の中で捉え直す作業である。「過去」を跡づける作業を通して「現在」の自分の位置を再認識し、その足場から自らが目指すべき「将来」像を確認ないし再

渡邊：キャリアヒストリーを書く

設定する。その「将来」像と照らし合わせつつ、キャリアデザインを軌道修正する中で、「次の一歩」の方向性が定まっていくのである。「キャリアヒストリーを書く」とは、自らのキャリアの振り返りを通して、生涯的視野で現在を捉え、将来を見通すことだと言えよう。